朝日新聞　２０２２年７月１日　朝刊　１３ページ　東京本社

癒やしてくれたのも中国の人

リレーおぴにおん

痛みはどこから 6

ここまで壊すのか、と。

怒り、悔しさ、落胆。もう再開できないかもしれないという不安。

それがない交ぜになった、10年前のあの日の心の痛みは忘れられません。

2012年9月15日。暴徒化した反日デモ隊が、中国南部の湖南省長沙市で展開していた三つの店を襲いました。店に押し入り、売り場を荒らし、店の前の資材には火がつけられた。

日本が尖閣諸島を国有化したことに対する抗議を理由に、全国にデモが広がっていたのです。

「日本式の店を」。中国側から請われて店を出したのが1998年。平和堂にとって初めての海外店舗でした。地元の若者を幹部候補生として100人近く採用し、日本で研修しました。「いらっしゃいませ」のあいさつから始まり、日本式のサービスや品ぞろえが喜ばれ、地域の一番店に成長していきました。

平和堂（中国）前社長　寿谷（すたに）　正潔（まさゆき）さん

1953年生まれ。総合スーパー平和堂（本社・滋賀県彦根市）の中国法人（湖南省長沙市）で社長を務めた。2020年まで約25年間駐在。

長沙は日中戦争の激戦地です。日本軍に身内を殺された人もいます。中国が歴史的に重んじる日に祝い事をしない、日本人は名札をつけて店に出ないなど、様々に配慮を重ねました。

国どうしのぶつかりあいは、民間企業にはどうしようもない。ただ、私たち小売業は、日本でも中国でもどこでも、地元のお客様の懐の中で商売をしています。店を襲ったデモ隊もまた、市民なのです。本社の夏原平和社長（故人）に報告すると「店をたたむことも考えなきゃあかんかなあ」と。

ところが、中国人の社員は悔し涙を流しながらも、再開へ向けて闘志を燃やしています。気持ちの切り替えが早い。彼らの表情から「復活できる」と確信した。夏原社長も事件の8日後に飛んで来て社員を励まし、湖南省トップに会って安全を要請しました。

1カ月半後。大勢のお客様が再開した店に詰めかけました。ほっとしました。「感恩」と書いた垂れ幕を飾り、感謝の気持ちを示しました。

中国のデモ隊から受けた痛みを、癒やしてくれたのもまた中国の人々、お客様や同僚たちです。国が違えば文化も違う。それでも懐に飛び込み、共有できる目標に向かって心を通わせることはできると信じています。

（聞き手　編集委員・吉岡桂子）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。